

風 狂

第4,6号

風 狂 の 会

詩

旅	北岡 善寿
ダリの記憶	長尾 雅樹
パパはお仕事	なべくら ますみ
グリコ男	原 詩夏至
懐疑の箱庭	高村 昌憲
5月の風	高 裕香
石垣	出雲 筑三

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十）	三浦 逸雄
-------------	-------

エッセイ

忍び寄る死の影	神宮 清志
---------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十二）	高村 昌憲 訳
-----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

あんずの色づく季節

トレドの景色を背に引きずりながら

田舎に戻った俺は道の曲り角で

村の男と何事かを話した

馬鹿が増えれば利口が喜ぶ

メリケンでもないのに

ジーザス・クライスト！

なんて叫んだこともあったな

何十年も前の焼け跡の街角で・・・

シチリアはどうだったかね

死の谷を覗いてから階段を降りて

ムッソリーニが作った道を歩き

エズラ・バウンドの名を思い出して

なんとなく変な気持になった

どちらも亡霊のようなものだから

音もなく元の過去のなかに消えたのだが・・・

大聖堂のある町では腹の足しに

バナナの房を半分に裂かせて買った

それはなんら悪いことではない

しかるにだ 聞いてくれ

なんのつもりか店のお内儀は

口を結んで嫌な顔してそっぽを向いて

手を突き出してお釣りをくれた

ああ ジーザス・クライスト！

その顔が永遠の謎のように

俺を囚えて放さない

褐色の怪獣が足跡を海辺まで点点と刻み
海は水平線が黄色の空と一線を描し
岸壁の丘が海に迫り出して
鏡板の床が海岸に置かれ
大地は荒涼として黒い影を揺らめかしている
木製の台盤が設えられて
枯木が根を床の上から覗かせている
台盤の角に
水色の数字の刻まれた蛇腹が蜜蝋に変容して
だらりと掛けられて
天幕は夢の軌跡を探し続けている
赤い地図が裏返しに置かれ
黒い蜂がうようよと集っている
追憶を呼ぶ枯木の枝には
絨緞生地の手が二つ折に吊るされて
地上には牛の顔の生き物が三頭
寝そべって
眉は波打ち
閉じた目は横に長く延びて
睫が髪の毛のように長く疎に生えている
口から褐色の舌をだらりと垂らし
頭の後に金の環が半円形に乗っている
錯誤の時間が変動して
岸壁の丘が砂を撒き散らす
獣の影を引き摺りながら
大地は陽炎の空間を映し出し
地表は錆びて
海辺をなぞりながら夢の刻を待っている
畏形たちは歩を合わせるようにぐったりとし
狂象のうごめく曖昧の世界に突入している

子供はしっかりとママに抱かれているのに
改札を行こうとする父親を見て
慌てる 叫び声に近い泣き声

パパ！ パパ！

母親の腕の中から落ちそうなほどに
身を乗り出して
母親の両手が引き締まる

パパはお仕事 お仕事なの
また今度の日曜日に帰って来るからね

パパも 振り向いて
行って来るからね
良い子でいなね

ああ、そうだった というように
幼い子は
身体を戻す

そう パパはまた明日から
お仕事
だからいい子でいなくちゃあ

ママは 聞き分けのいい子に
ちょっと
涙をにじませる

ママだって淋しいの

「ゴールイン！」
万雷の拍手を確信して
道頓堀のグリコ男よ
君はテープを切る
無限に切り続ける
脇の下を晒し
星も見えない夜空へ
みずみずしく
両手と左足を跳ね上げて。

だが男よ
光の巨人よ
至高のアスリートよ
君はそもそも
何の〈選手〉だ？
何のために
誰によって〈選ばれし者〉なのだ？
そうして
一体何に勝利した罪で
そこに
歓喜の瞬間の姿勢のまま
磔けられているのだ
いつまでも？

笑うとこぼれる白い歯が魅力の
体育会系のキリストよ
なるほど
君の後ろに道はある
そうして君の前に道はない
全くない
君のゴールの一步先はもう
〈こちらの世界〉への断崖絶壁で
その底を流れる
道頓堀川は

今夜も底なしにどす黒く
君の輝きは
他の全てのネオンサインと同じく
きらきらと上っ面を彩るだけ。
だが
それなら
橋を歩き交う人波の頭上で
君が
無駄に明るく
無駄に健康に
輝き続けることの意味とは
何なのか？

それにしても
この地上のどこにもない競技の
栄光のゴールドメダリストよ
もし今
たった一秒
君の凍った時間が
融けてぬかるみ
君の足先が
ついうっかり
爪先のバランスを崩して
大地を
どしんと
踵で踏みしめてしまったら
何が起きるだろう？

その時
君の足下に轟くのは
このどうしようもなく壊れた世界が
ジグソーパズルの
最後の1ピースを迎えて
遂に待望の「ゴール」にたどり着いた
歓喜の
万雷の
「ハレルヤ！」なのだろうか？

それとも

むしろ

それらの全てを

木端微塵に終わらせてしまう

地雷の

炸裂の

「ドカーン！」なのだろうか？

何時からだろうか総理大臣の発言が
こんなにも無責任に思えて来たのは
何時からだろうか高級官僚の言葉が
根も葉も無く空虚になって来たのは

疑うことは正しくないことだろうか
政治家や官僚の言葉を疑いたいの
人間としては当然ではないだろうか
国会は動物並みの傲慢と隠蔽の箱庭

もはや信じる者は救われない奴隷だ
何故なら自ら判断することも出来ず
権威だけを信じて生きているからだ
信じれば増えるに違いない奴隷の数

行為や思考を過信して疑わない者は
狂人であると高邁で賢明な人は説く
自分自身の過失さえも隠蔽する者は
狂人として確信もなく盲進して行く

疑うことは今を否定して別の肯定を
求めて^{てつけつ}剔抉を可能にする英知の冠だ
疑うことは今の思想とは別の思想を
形づくらねばならない崇高な意志だ

5月の風は、私を山に誘い出します
木々の若葉を枝の五線譜に並べて
緑の音楽を奏でては小鳥と歌います。

5月の風は、あなたを海に誘い出します。
悲しみのしずくを波の五線譜に並べて
青の音楽を奏でては魚たちと歌います。

5月の風は、私とあなたをカフェに誘います
コーヒーの香りを湯気の五線譜に並べて
無言のまま そっと愛を歌います。

かつて威厳に満ちていた大手門
今はひっそりと石垣ばかり
一礼して入城 歩を進める

さびれても虎口を守ってきたのか
仁王様のごとく
すくと立つ老樹

本郭めざして新緑の森をゆく
そそる石垣の雪が日光を浴び
水球が煌めきを放っている

栄枯を越えた静かな山脈
大樹がときたま雪塊を落とすと
白鷺のように舞い上がる

天守は何を守ったのか
最期の最後まで
滔々と義をとおした幾星霜

恩讐かなたに
耳目に届くは
石垣たちとの密やかな会話



三浦逸雄「ポートレート」12号（麻布・油彩）

「背後から忍び寄る」と言えば、「死の影」と相場は決まっている。死の影というものは、知らぬ間にそっと背中の方から近付いて、たちまち現実と化すものようだ。

昨日まで 人のことかと 思ひしが

おれが死ぬのか これはたまらん 蜀山人

ついにゆく道とはかねて ききしかど

昨日今日とは おもはざりしを 山ノ上億良

こういった歌が残っていて、われわれの心に沁みいつてくる。「死」という誰も避けることの出来ない厳かな現実を思って、深刻にうなずくほかない。あの兼好法師も書いている。「死は前よりしも来らず。かねて後に迫れり。…沖の干潟遙なれども、磯より潮の満つるが如し」（『徒然草』一五五段）

前のほうからゆっくりやって来るとなれば、視野に入っているから分かる。ところが後ろから迫って来るのでは見えない。予測できないから「突然」現実のものとなる。もっとも「見えて」いたら、はたしてひとはそれに耐えることが出来るものだろうか。背後から忍び寄っていただくので、嘆く間も短くてすむのだろう。これも神の思し召しであり、神の叡智なのかもしれない。

死ぬのは避けられないとして、せめて楽に死なせてほしい。この願いを抱かぬ者があろうか。しかし苦しんで死ぬ姿をあまりに多く見聞きするものだから、自然死なんてありえないという説が多い。わたしの友人で「ガンは狙い目だ」という者が居る。心臓病・ガン・脳卒中という三大死因のなかで、一番楽なのがガンだからだというのがその理由なのだが。

それでもわたしは自然死はあると思う。小林栄三郎というドイツ文学者が居て、実家は東京下町の大工である。正月に実家に帰り、炬燵にあたっていたところ、となりにいた老母がジュースがほしいというので、コップに注いでだすと、それを受けとって一口飲んだあと、気がついたら息を引き取っていたという。こんな死に方もあるのだ。いったいどんな善行を積んだら、こんな素敵な死に方が出来るのだろうか。昔からいうところの大往生というものだろう。稀とはいえ自然死はあると思う。

一般に老衰を自然死と考えるなら、九十歳を越えるとたとえ病死でも老衰に近いので、これも自然死とみていいのではないかと思う。長い入院生活のない自宅での病死なら立派な自然死だろう。

健康体でありながら死なねばならないひとも居る。戦死、事故死、殺人、刑死等これは様々である。不自然死の最たるものだ。囚われの身となって刑死するとき、ひとはその心の中にどんな思いが駆けめぐるものか想像にあまりある。死刑廃止論が多く支持を得るのも、その残酷さ故であろう。死刑を宣告され執行されるということは、死がはっきり見えているということであって、背後から忍び寄るという神の思し召しにあずかれないところが、他の死に方と決定的に違うところである。事故死、殺人、戦死においても、死の瞬間まで助かるのではないかという希望をもちうる。しかし刑死はそうした一縷の望みをすべて奪い去ってしまうから、こんな残酷なことはない。ドストエフスキーは死刑宣告され刑場まで引き出された体験を『死の家の記録』の中

で書いている。まさに執行されようとした瞬間「死一等を減じ……」と読み上げられ、シベリア送りとなった。そのとき最初に執行されることになっていた囚人が処刑台から下りてきたとき、完全に狂人となっていたという。

死刑囚がその処刑前夜に書き残した記録を、わたしたちは読むことができる。

「私はこのごろ真実のことを言おうとすればするほど、言葉というものが如何に不完全なものかということを感じてきました」

これは尾崎秀実が竹内弁護士にあてた遺書のなかの一節である。自分の胸のうちを伝えようとしても、言葉がないというかきむしられるような腹立たしさを思うと、暗澹としない者があるうか。

浅野内匠頭の辞世の歌を読んでも、胸に訴えてくるものがある。

風さそふ 花よりもなほ われはまた

春の名残りを いかにとやせん

ところがここに死刑前夜に書いた文のなかで、すこぶる落ち着いた心境を語っているものがあり、これにはただ愕くほかない。幸徳秋水がそのひとである。

「私は死刑に処せらるべく、今東京監獄の一室に拘禁せられている」と書きだしている。自分の家族はどんなに嘆いているかと、おもんぱかったあとに次のように書く。

「左れど今の私自身にとっては、死刑はなんでもないのである」さらに次のように書いている。

「病苦の甚だしくないだけ更に楽かも知れぬ」

この落ち着きはらった態度、悠揚せまらざる心意気、豪胆ともなんとも表す言葉がない。『死生』と題するこの文を読んでいると、自分の気の小ささにひきかえ、こんなひともいたのだという思いが、なにか清々しい気持ちにさせてくれる。

自殺もまた不自然死の最たるもののひとつである。ただ上記の不自然死と決定的に違うのは、自分の意志で選んだ一種の殺人行為ということであろう。「殺人行為」といっては過激というなら、積極的死と言いかえてもよい。自殺というと太宰治を思い出す。太宰は七回も自殺を図っただけあって、なかなか穿った自殺観をもっていた。自殺は処世術だというのが、彼の主張だったという。いろいろ考えると、この説にわたしはほぼ同調できる。自殺もまたひとつの生き方であって、その選んだ道を誰も否定出来るものではない。

老人の自殺が増えているという。さもなりなんと思ふ。老人の自殺というと、「悲惨」と決まり文句のように言うけれども、必ずしも悲惨とは限らないと思ふ。生き方の選択肢のひとつとして、とうぜんあっていい筈で、病苦に長く苦しみ、家族をも苦しめることを考えるならば、この生き方を選ぶ権利はあっていい。老人の自殺のなかで、みごととしかいいようのない例がある。八世市川団蔵、八十四歳。歌舞伎座で一世一代の引退興行をしたあと、四国巡礼に旅立ち、瀬戸内海航路の汽船から投身自殺、死体はいまもってあがっていない。

その晩年の狂歌。

長生きは 損じゃ月々 いやなこと

見聞く憂き世は あきてしまった

そして辞世。

我死なば 香典うけな 通夜もせず

迷惑かけず さらば地獄へ

これほど及びがたい生き方があるか。歌舞伎という伝統芸のなかを生き抜き、その栄光のなかでも心は冷めていて、最後は海水に化身するとは、なんという名人芸であろうか。子供のころから鍛えに鍛えてきたひとにのみ許される生き方であり、死に方だと感心する。こんなみごとな生涯をもつことも、場合によっては可能なのだと思うと、生きる勇気もわいてこようというものだ。

川端康成の最期もやや謎めいていて心ひかれる。鎌倉の山を通り抜けて逗子に至ると、太平洋に直面した眩しさに別世界に来た感がある。そこで川端は命を絶ったのである。こうした結末を選んだこと、そしてそれを完結させたことに、このひとの美的意思を見る。病院のベッドの上で何本もの管に繋がれながら、一ヵ月も横たわることを拒否したのである。悲惨どころか快挙といたい。

べつに自殺を奨励するつもりはない。とくに若いひとのそれは、一種の病気らしいからお気の毒というよりないし、なんだかもったいないと思う。しかし老人の場合は、苦痛からの開放という意味もあり、ひとつの選択肢として許されていていい筈だと思う。罪悪視されるいわれはない筈で、人間特有の死に方を選んだことを認め、その意志を尊重するといった受けとめ方がそろそろなされていいころではないかと思う。

背後から忍び寄る死の影をうすうす感じとるひとがいるいっぽう、まったく予期せぬ出来事として、そのときまで気づかぬひとがいる。七十歳の男性が喘息発作にはじめて襲われ、数日後病院で亡くなった。このひとはまったく予期せぬひとのひとりで、会社でも自宅でも大弱りして、病院がなにか間違えたのではないかと疑っている。

これに対し心臓病で亡くなったわたしの兄の場合は、うすうす感じていたようだ。死の準備をすべてしてあったからだ。うすうす感じていたどころか、確信に近いものをもっていたのかもしれない。またあるひとがゴルフにゆき、心臓病で亡くなったときも、日頃保険嫌いのひとがこのときに限って多額の保険を掛けていたところを見ると、予期していたみたいだと家族は言う。どうやら心臓病で死ぬ者には、予知するひとが多いらしい。心臓が弱ってくると、気圧の上がり下がりが体で感じとれるようになり、動物的カンが鋭敏になる、といったひとが多い。このことは心臓病に限らず他の臓器疾患にもあると思う。

自分の家で死にたい、長年親しんできたふとん、手元の品々に囲まれ、家族の見守るなかで最期のときを過ごしたい、こんなささやかな願いが叶わないのが現代人の宿命ということになってきた。病院という非日常性のなかで、機械にシステム管理され、苦しみぬいて死んでゆくとはなさけない。これは本人および家族はもとより、社会的不幸ではないか。肉親の死顔くらい教育的なものはなく、どんなおっちょこちょいでも親の死顔にあってしんみりしない者はない。おじいさん・おばあさん・お父さん・お母さんと亡くなってゆくごとに、ひとはあたかも背が伸びるがごとく成長するものである。こんな人間的で自然で貴重な経験を、近代医学というものが奪ってしまったのだ。それが社会的歪みを生み出していないと誰が言えようか。

日本人の多くは死のことを考えないのに対し、ヨーロッパ人の半分以上のひとが考えているという。確固とした死生感をもっているという。だとすれば、確固とした今日を生きることになるのではないか。自分が老い、そして死ぬということに対する具体的イメージをもち、確固とした態度をもっているなら、今日を生きる生き方をも決定する。死のことを考えていくうちに発見した一番大きいものはこれだったような気がする。周囲を見渡すと、そのようなひとはほとんど見

当たらない。老・死ということについては、日本人はモラトリアム人間である。独自の信念をもって生きるひとが、ほとんど居ないということの困のひとつは、こういうところにも求められるのかもしれない。（了）

第十章

一ヶ月も経たないうちに軍用運搬車が、砲台を探しにやって来ました。敵から遠く離れている時は快適です。馬たち自身も大喜びです。競り落とすのを仕事にしている人々は、馬からの降り際の緊張した行為や停止の時には道の中央近くで手で押さえられていた馬の頭部を、上手に押さえる老婆心を忘れません。その仕草は全てが極めて合理的です。軍隊の理屈では、少なくともあなたに核心を突く様なことを言いませんし、その方法をあなたに語っても最良のものは少しもありません。軍隊教育とは忍耐すること以外に無く、それは無知な人になることを繰り返します。でも迅速に行動する精神は悪いものではありません。しかし、この賢明な教育学は絶対的権力を前提にしています。教官は、傍聴者の様な兵たちに興味を持たざるを得ません。そこから最も優れた人々には雄弁を教えますが、平凡な人々には何も教えません。これらの快適な夜の時間に誰もが、私自身がそうであった様に、自分の仕事のことを考えていたのだと私は思います。私たちは、古くて黒い外套を着た砲兵たちとすれ違いました。彼らは軍人であっても、弾薬の列でしかありませんでした。

私たちはシャーロンの野営地の小屋にいましたが、大部分の小屋には屋根がありませんでした。小雨が降り寒かったです。私たちは、大きな薪の山から松の木を持って来て残らず燃やしました。その周りでは誰もが自分の下着を探していました。この時私は、果てしなくホメロスの英雄たちのことを考えました。気持ちの緩みも少しはありました。Cがバケツを二つ持って私を探しに来て、言いました、「七スーのシャンペンがあるが、どの位お飲みになりますか」。私は答えました、「三十リットル飲ませて下さい」。私は少しでも新鮮なものに目がありませんでした。この葡萄酒は確かに本物のシャンペンでしたので、悩みました。しかしながら私は、権力が死んでいなかったしるしを幾らか見ました。下士官たちが懸命に交渉していましたが、ゴンティエはそのことで何か知っていました。上官の権力は、責任ある下士官たちによって支配されています。上等兵は全てに堪え忍び、そして上等兵を仲間扱いしている部下たちは、上等兵に心配をかけたくありません。かくして何事もついに自ら行うこととなります。私たちは殆どの者が洗濯しましたし、同じ方法を守らないと非難されました。王冠型のパンは、私が経験した以上の大きな喜びを与えてくれました。結局のところ私たちはトゥール手前の村に到着しました。そこはラ・ヌヴヴィルと言って、我が国の昔の戦場に対して開かれた狭い谷でした。そこから私たちは間もなく歯の抜けた様な村であるポーモンを確認しました。宿営は耐え難いものです。下士官たちはそこでは決して休息しません。点呼に答え円陣が作られます。大尉の話が聞かされます。T大尉は絶えず戦闘態勢の儘でいても楽しくなる方法を見付けました。それは馬たちへのブラッシング、荷車や大砲を付けての歩行訓練、馬たちの散歩です。私たちには全てが楽しかったのです。ゴンティエは戦争に参加するのを学ぶための教育を受け、戦争に決して参加しない人々の中心へ送られました。私は小さな部隊で任務を帯びた儘でいました。しかし幸いなことに私にはもう一つの仕事が見付かりました。それは完全に私に適していました。平和だった時代に、私はエッフェル塔からの電波を聞いて楽しんでいました。モールス信号を大変良く覚えました。私は全師団の中から選抜された人々の集団で、モールス信号を学ばなければならなかったのですが、そ

の中にCも居りました。私は直ぐ様、呼び子の音を書き取りながら、その音をモールス信号で読むことを覚えました。そして、J中尉が加わった時に私は最速で勝とうと思わなくなりました。彼はモールス信号を知りませんでした。少しも知らなかったのです。ところが彼は文字に変換する速い方法に感嘆していました。エース (as)、美 (beau)、椰子の実 (coco)、それ左だ (dia) などの文字です。これらの不思議な言葉は、子音を線、母音を点によって表されています。私たちは全員がゆっくりしたやり方で行っていませんでした。私は中尉にそのことを気付かせました。だが、中尉は私の言うことさえも聞かずに、単に言いました、「私はあなたにこの方法を用いる様に命じる」。部下たちには全く必要の無かった一連のこれらの言葉を、記憶に留めなければなりません。中尉は満足していますが、私たちには構わない様にして居りました。六名ばかりの本物の職人を非常に早く養成することは私には喜びでした。光信号による文字の送受信も知っていた二十名程の平然とした信号兵を別にしても、彼らは無線電信において輝いて居りました。一日に二回の講習が二ヶ月間行われて、全てのことが達成されました。海員の信号・航路監視兵たちも、その他に多くのことを学びます。そしてこの状況の中で私も、知識が繰返しと慣れと速度を前提としていることを経験しました。それはラテン語でも数学でも同じ様に本当のことです。しかし先ずは退屈に勝たなければなりません。そして退屈に慣れることを覚えるには、軍隊しかありません。

これらの勉強は、長い間中断されていましたが、私の馬術の訓練も中断していませんでした。そして再開することになりましたが、決して長続きしませんでした。馬での散歩が少なくとも、最後まで落馬せずに到着する術を私は覚えるだけです。そこではこの動物たちの尻の上を殆ど掠める様に、氷で覆われた傾斜の急な道に降りましたが、その日は私が大いに自慢する馬たちでした。同様に私は、私の葦毛の馬と直ぐに別々に別れなければなりません。軍隊の権威ある人は、一度ならず適正に従って私を使用する術を知っていましたし、それは更にその後も起きました。

一九一六年一月まで、私たちはラ・ヌーヴヴィルに潜んでいて、そして次にはトロンドに潜んでいなければなりません。何回も演習がありましたが、それらは酷いものですが、滑稽なものでもありました。J中尉は食事中に二、三回私を呼びましたが、それは私が良く知っていたことを私に繰返し言うためであり、そして私に繰返し言わせるためでもありました。しかしゴンティエと私は、我が軍が勝利した後の翌日は大変に忙しくなるに違いなかったので、早速前日の夜の時から電話線を持って行く手段を覚えました。それは司令官を賛辞させ得るものでもありました。その上、襲撃に関する全ての動きが不受理でしたし、私たちはそのことを知っていました。でも、地位の高い司令官はそのことを知りませんでした。歩兵たちは砲火を想像して腰まで水に這入っていました。そして私たちの処から数キロメートル先で、私たちは戦争の本当の音を聞きました。日中の明るい時に、私たちは何機もの飛行機が飛ぶ大空の雲が薔薇色になり、分厚くなった煙を村々の上に幾筋も見ることが出来ました。

現実に一種の遠征がありましたが、それはやはり極めて滑稽でした。私たちは、アプルモンの高い森に沿っているコメルシーの町を前にした場所を確保しに行きましたが、そこは或る煉瓦工場を大量の一斉砲撃で粉々にするのを目指して行きました。この冒険には危険がありませんでした。敵が我々の場所を知る時間が無かったのです。森は大変に美しく、奥深い避難所も本当に安全な監視所を備えていて、模様溝が彫られたガラスも嵌まっています。そこでは誰もが私の電

話を握りましたし、私は全て司令官の名誉がかかった調整のための場面では証人にもなりました。彼は内気な人物でした。五十歩も行けば、木々を隠している霧を自分の両眼だけで見ていました。彼は晴れ間を待ちましたが、やはり無駄でした。最後の知らせが着きました、「あなたの調整は済んだのか」。「しかし、私たちには何も見えません」。「どうしてだ。全砲台は一斉砲撃の準備が完了したし、我々は最早あなたしか待っていないのだ。従ってあなたは何を考えているのか、等々」。大変に素晴らしい考えが行われたのです。T大尉は不幸を生まないために極めて遠方を攻撃する様に告げました。もう一人の大尉は地図上で調整し始めましたが、砲撃用の地図は既にありませんでした。私は彼が参謀部の地図を長い間調べているのを見ましたが、砲手たちは疲れて仕舞っています。結局仮定の儘で調整が行われて、どんな砲撃の雷鳴であっても決められた時間に爆発しました。煉瓦工場も全滅したと仮定されました。翌日、監視兵たちは煉瓦工場が無傷だったのを再発見しました。でも、私たちは既に出発していました。

私は、太い枝を燃やしていたかまどの様な、暖かな奥深い避難所での良き思い出を忘れませんでした。そこでの思い出の一部は夜にかかるものでした。それ以外は、そこから三里程離れた屋根裏部屋の中にかかるものでした。この程度の戦争なら耐えられます。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけてたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにはいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『—ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

アラン『大戦の思い出』（十一）第九章：戦争映画では見られない兵隊さんの過酷な日常が迫ってきました。困難な仕事を命令する上官は、優しそうで戦争の毒を盛った人だった。主人と奴隷の間がら。砲火、砲弾の音、死体、破壊された大地、撃墜された飛行機。危険でも神に任せ、一種の興奮によって支えられていた兵隊さん。戦時勲章は、最も貧しくてつまらないものと感じる。権威が軍隊を打倒していた戦争は再び繰り返してはならないと思いました。

廁のついでにの体感と雑感：外国のトイレについて教えていただきました。日本のトイレは世界一と。ウォッシュレットを最初に開発したのは、能面師の外沢氏ということも知りました。私は和式ですと立ち上がるのに身体的に辛く、洋式で助かっています。

三浦逸雄の世界（二十九）「うづくまるひと」：うづくまるひとの苦悩が分かるようです。

四月：四月のことがよ良くうたわれて、人生賛歌に共感しました。

拳：迷える小さいもののひとりをも軽んじないように・・・安積得也の詩、「一人のために」を思い出し、共感しました。

所定の場所：所定の場所に置いておけば見つかるのに、ちょっと置き忘れて、探し物に時間がかかるこの頃です。最終連に共感しました。

水影図：水面に揺れる光と影から、人生の深い思いが伝わってきました。

春は狂奏曲から：懐かしいうたが、ピアノから流れてきました。若かったころの思い出と共に。鎌倉を歩いた情景が浮かびました。

炎天下：言葉遊びと現実が面白いと思いました。お父さまの好きだった、川越生まれの素晴らしい浪曲師の東武蔵のことを知りました。「明石の夜嵐～たたる妖刀」を聞きました。

廃城：天草四郎の乱の後、破壊命令の出た原城のこと、徹底的に弾圧されたことを知りました。

父と娘：日曜日の夕方のバス停留所での情景が見えるようです。娘を見送る父の姿に何か訳があるように感じました。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第46号

2018年5月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/121713>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121713>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト